

バーボールドと「未来」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027600

バーボールドと「未来」

鈴木実佳

はじめに

バーボールド (Anna Laetitia Barbauld, née Aikin, 1743-1825) の名を知るようになるのは、18世紀研究者の場合、(これは後から振り返ってみると、本当に不当な扱い以外のなにもものでもないのであるが) 圧倒的にリチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) の手紙の編集者としてであろう。少なくとも、特定の個人の場合、1990年にしろいうころ、(それが図書館の閲覧室として使われなくなるときにはパニッツィ・ドームと呼ばれることを知った) 大英図書館の丸い閲覧室の中央付近で、耳慣れない女性の名前が記されているのを見て、何とも思わなかった。

リチャードソンの手紙は、人々が残した手紙の中でも格別の重要性をもっている。書簡体小説で名を成したリチャードソンの手紙集は、単に個人の交流や言行の記録としても面白い。そしてそれだけでなく、もともと印刷屋の彼が、手紙の代書を行っていて、手紙のお手本が欲しい人向けの手紙文例集へ、そして文例集を編む際に特定の間関係や状況を設定したところから、手紙を書く人格の設定へと発展し、フィクションの生成につながっていったこと、手紙を書く架空人物が、手紙を書く現実の人々を誘うような働きをして、作品をきっかけにして、彼が多くの文通相手をもったことは、伝説のようになっている。さらには、手紙が彼の新たなフィクションに影響していくという事態をつくっていった。実際に交わされた手紙と、彼が生み出していった文学の間に、このように多重的に密接なつながりがあるために、彼の手紙は膨大であり、そして非常に重要性をもつ¹。

¹ See for example, T. C. Duncan Eaves and Ben D Kimpel, *Samuel Richardson: A Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1971); Thomas Keymer, *Richardson's Clarissa and the Eighteenth-Century Reader* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992); Thomas Keymer and Peter Sabor, *Pamela in the*

そのように特異な重要性をもつ人物の膨大な手紙をまとめて、編集し、人々が読むことができるように出版しようという意図をもった人物について、ここでは考察してみよう。

情報の集積と編集

1990年代以来、幾度となくバーボールド編の書簡集を読んできた。しかし、正直なところ、興味があったのは、その6巻本のなかで、手紙集が始まる第一巻の後半以降だった。もっと正直なところ、第一巻の前半に、編者が書いたリチャードソン論が収められているということに注意をむけたことがなかった。この女性の名前、何だろう、なぜこんなにも重要なリチャードソンの手紙がこの人に編集されているのだらうと思ったことはあっても、そこではいつもリチャードソンの手紙というものに重要性があり、編者バーボールドのことを知る意欲と関心がなかった。

18世紀末から19世紀、知識を集積し、選定して、「編集者」の取捨選択が入った知識・情報を世の中に送り出す様式ができつつあった。総合的に情報を集め、個人の選択の目を通して、その結果を人々に提示するという知識の扱い方が、この時期に顕著になるのである²。彼女は、50巻にもわたる小説のコレクションである『英国小説家』(1810)の解説者であり、このコレクションに前書きを書いている。莫大な知識の集積の上に、壮大な視野をもって、一般読者たちにたいする学者としての使命を果たそうというこの姿勢を、バーボールド研究の第一人者マカーシーは、サミュエル・ジョンソン(1709-84)が活躍した範囲の広さになぞらえて「ジョンソンの」と呼んでいる³。カバーする領域の広さに加えて、彼女は、一人の学者というよりも、企画を立案し、指揮をとって運営していく企業家の面も持っている。

Marketplace : Literary Controversy and Print Culture in Eighteenth-Century Britain and Ireland (Cambridge: Cambridge University Press, 2005).

² Rachel Wexelbaum, "Is the Encyclopedia Dead? Evaluating the Usefulness of a Traditional Reference Resource" *Reference Reviews* 26, no. 7 (2012): 7-11, available at https://www.researchgate.net/publication/235267814_Is_the_encyclopedia_dead_Evaluating_the_usefulness_of_a_traditional_reference_resource; L. E. Sullivan, "Circumscribing Knowledge: Encyclopedias in Historical Perspective," *The Journal of Religion* 70, no. 3 (1990): 315-39, available at: <http://www.jstor.org/stable/1205204?seq=6>

³ William McCarthy, *Anna Letitia Barbauld : Voice of the Enlightenment* (Baltimore, Md. ; London: Johns Hopkins University Press, 2008), pp. 113-14. これは、バーボールドに関する大部の研究書で、本稿でもこれに拠るところが多い。

バーボールド

教育者であり、神学者であった非国教派の牧師の娘として、彼女は生まれ育った。教養ある父親に教育されて育った典型的な「お父さんの娘」かと思うと、彼女を教育したのは、牧師の娘であり、牧師の妻となった彼女の母親 (Jane Aikin, née Jennings, 1714-1785) であった。そして成長してから知的な刺激を受けたのは、4歳年下の弟だった (John Aikin, 1747-1822)。弟は、外科医及び薬剤師の訓練を受け、エジンバラ大学での医学教育 (1764-1766) を受け始めたが、そこでは学位をとるに至らず、しばらくしてからライデン大学で医者の資格をとった (1784)。エジンバラもライデンも、18世紀の医学の発展に大きな役割を果たした医学教育の拠点である。その後、内科医として営業しながら、執筆活動を行っていた。1796年に発作を起こして以降は、医者をやめ、そこから10年間は *the Monthly Magazine* の編集に携わり、文学活動を続けた、バーボールドは、この弟と、文理の双方にまたがる興味を共有していた。

現存している手稿の手紙とバーボールド版を比較することができる現代の研究者の目から見ると、バーボールドの「編集」は、正確さを欠き、恣意的な変更が随所にみられるように感じられる。もとの書簡 (その主要な部分は、Forster Collection, V&Aにおさめられている) との差異が際立つのである。しかし、それで編集者としてのバーボールドにたいして簡単に悪い評価はくぐせないという研究がすでに行われている。リチャードソン自身による複数のヴァージョンがあったり、コレクションの持ち主であるフィリップス (彼は出版の後、1828年にコレクションをオークションに出している) の都合があって、改変が加わった可能性が指摘されており、現存する手稿と、1804年版の齟齬は、バーボールドの編集者としての資質を必ずしも傷つけるものではないのである⁴。

その彼女の読者の迎え方を詳細にみてみよう。彼女が編纂した書簡集の冒頭には、まず、なぜこの人が编者となってこのように重要な書簡集が出版されるのかという問いに直接答える「ご案内」がある。「私的な手紙が公の目にふれる際、どうやって出版が可能になったのかというのが最初におこる疑問であろう」と、多くの人が興味をもつ、重要書類の来歴が明かされる。手紙というものの性質上、送り主から普通は離れてしまっているはずで、文通の一方の側には受け取ったものしか残らないのに、なぜ文通が完全なかたちであるのか。当人の

⁴ “What Did Anna Barbauld Do to Samuel Richardson’s Correspondence? A Study of Her Editing,” *Studies in Bibliography* 54 (2001): 191-223.

死後、誰から誰にわたったのか。当事者たちはこの出版を承知しているのかといった一般読者の資料に関する疑問を想定して、それに次々と答えていく。

相互の手紙がまとまっている理由：

リチャードソンは、自分の手紙の出版を予期して、受け取った手紙を保存するとともに、自分が書く手紙は、送ってしまう前に、娘たちと秘書の仕事をしていた甥に写しを作成させていたので、双方の手紙がまとまって存在する⁵。

来歴：

彼の死後、そのコレクションは、娘のアン・リチャードソン (Anne Richardson, のもとにあったが、彼女が亡くなって、リチャードソンの子の代の人々がすべて世を去り、孫の代になって、それを出版者フィリップス (Sir Richard Phillips, 1767-1840) が購入して、バーボールドの手元に来た⁶。

当事者

ハイモア (Susanna Duncombe, née Highmore, 1725-1812, リチャードソン死亡と同年に結婚したので、ここでは旧姓のハイモアと呼んでおくことにする) は、快諾し、その他当事者は亡くなっている⁷。

彼女が手紙の選定にあたって留意したのは、持ち主であるフィリップスと読者の両方にたいして「正當な扱いをする」ということである⁸。手紙という物品の持ち主であり、有名文人の手紙を投資の対象にして、出版しようとしているフィリップスと、書物市場の向こう側にいて、文人の手紙を読む機会を待っている読者及び後世の研究者たちの間には、一致する利害と、相反する利害がある。出版者は機を逃さず、なるべく早く成果物を期待したい。読者は正確で注意の行き届いた作品を待っている。その間に立って、編集者としてのバーボールドは、注意深く、苦慮しながら、自分の仕事を進めていこうとしていることがわれる。

このように、「サミュエル・リチャードソンの生涯と著作に関して」と題したリチャードソンその人に関する論考に入る前に、彼女は手紙という物体の来歴を明確にしておく必要を感じて、読者への「ご案内」を自分の名前入りでまず

⁵ Anna Lætitia Barbauld, ed. *The Correspondence of Samuel Richardson ... Selected from the Original Manuscripts ... To Which Are Prefixed, a Biographical Account of That Author, and Observations on His Writings.*, 6 vols., vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 2011[1804]; reprint, 2011), I, iii.

⁶ Barbauld, I, iv-v. フィリップスは、彼女の弟John Aikin経由で(彼の勧めがあって)彼女に依頼したらしい。

⁷ Barbauld, I, v.

⁸ Barbauld, I, vi.

書いたのである。

リチャードソンの生涯

ここでは、「生涯」で書かれているリチャードソンの人生の内容についてではなく、編者としてのスタンスの取り方をみるために、この部分を読んでおこう。この部分は、212ページに及び、第一巻の半分以上を成す。

通常、人生の物語は、その人がどこで生まれたか、どのように幼少期を過ごしたかについての記述で始まる。ここで、リチャードソンが生まれるのは、第31ページである。『トリストラム・シャンディ』(1759-67)のように、誕生時を人生の最初とする物語を茶化しているわけではない。彼女が30ページを費やしているのは、いわばリチャードソン登場に至るまでの文学の世界の動向についての彼女の見解である。

彼女は、文学を嗜む国では、いつの世でも、「架空の冒険物語」が、人々を喜ばせてきたことをまず指摘し、フィクションの重要性を論じている。それは時代を映し、また「少なからず次の世代の生き方に影響を与える」という見解を彼女がここで述べていることは、本論の主旨からして、たいへん注目に値する⁹。作られる文学のその時代との関係だけでなく、未来との関係に彼女が注意をむけていることを端的に示しているからである。公平な目で見られたときの彼女は、子どものための文学創作で評価されるので、ここで次の世代への作用について言及することは、さほど特別なことではないと考えることもできるが、子供のための文学作者が、当然のこととして必ず未来の社会を想定して、その未来の担い手に作用しているのだという自覚をもって物語を創作していくというわけではない。彼女のこの未来への視点は、注目しておこう。

そのような重要性をもつ分野でありながら、英雄叙事詩や風刺に比べてフィクション及びその作家の地位が低いことを案じてもいる¹⁰。彼女は、フィクションの重要な役割を論じ、その作家のなかでもリチャードソンは、人々が好む文学の傾向を「新たな道」に導いた人物として高く評価している¹¹。彼女の「リチャードソンの生涯」は、このように、リチャードソンという個人を、文学の世界の歴史という大きな場に位置付けるべく、広い視野を確保して、その視野

⁹ Barbauld, I, vii.

¹⁰ Barbauld, I, vii-x.

¹¹ Barbauld, I, x.

は主に過去の歴史に注がれているが、未来に向いていく兆しをもっている。

この「生涯」の中で、もちろんリチャードソンが第一の主要人物であるが、彼女の議論の中で度々登場し、重要な位置を占めているのが、サミュエル・ジョンソンである。リチャードソンが作家としての仕事をしていた同時期に文壇で顕著な活躍をしていた人物であるので、その頻出も当然であるかもしれないが、登場のさせかたをみると、バーボールドの編集者としての立ち位置を知るための参考になると思われる。彼は、「我らの偉大な批評家」として現れる¹²。フィクション作家の位置づけを論じている際に、ジョンソンのリチャードソンに関する見解を使う。「我らの偉大な批評家」であるジョンソンによれば、リチャードソンは、「人間の本質についての理解を押し広げ、美德の命ずるところに従って情熱がはたらくように教えた」。そしてこの見解は、彼女が判断するところによると、「高い賛辞であり、正当な賛辞」である¹³。

そして、第53ページから155ページまでの約100ページを『パミラ』(1740)と『クラリッサ』(1747-48)に割き、最後の60ページ余りでリチャードソンの人柄を述べて、その中で多くの文通者をもったことにも触れている。そして彼女のリチャードソン伝をしめくくるのは、エリザベス・カーター(1717-1806)からの引用である。カーターは、エピクテートス(60?-?120)の著作翻訳を行い、そのストア哲学がバーボールドにとって非常に魅力的に感じられたのであろうというのがマカーシーの見解である¹⁴。カーターの博識で他分野にわたる活躍が、この女性編集者にとって崇敬に値するものであったことは容易に想像できる。

Eighteen Hundred and Eleven (1812)

334行に及ぶ詩『1811年』は、作者としてのバーボールドの名を示して1812年に出版された。年号を題名とする詩が風刺として書かれるという伝統に沿ったものである。形式は、18世紀前半のポープ(Alexander Pope, 1688-1744)が完成させたと言われる英雄詩体二行連句を使い、新古典派的な厳格で整然とした様相を呈している。ドライデン(John Dryden, 1631-1700)やポープの風刺詩と同じように、非常に学術的である面もち、また時代の関心事に即した時局

¹² Barbauld, I, xxii.

¹³ Barbauld, I, xxii; see also, McCarthy, pp. 113-14.

¹⁴ McCarthy, pp. 51-8.

的要素をもつ。政治的立場が明確な詩であるので、厳しい批判の対象にもなった。この当時の政治的風潮、バーボールドがとっていた政治的立場については、マカーシーの著作に詳しく述べられている¹⁵。

第39行からみとめることにしよう。強大な海軍をもち、広い世界を相手に政治的商業的に成功して富を蓄積した自分の国の栄光の描写である。勝ち取ったものは、富と安寧をもたらして、自国は驕っている。

考えてみるがいい、英国よ、ゆるりと座しているがそれでいいのか
臣下たる諸海に君臨する女王たる島、
怒れる大波が、遠くで唸っているというのに
君の眠りに心地よだけか？君の岸にやさしく触れてくるだけか？
危険は迫ってこないのだから、本気で戦わなくていい
敵の馬の蹄で君の緑の芝が荒らされることはないのか？
君のところのお追従者たちはそんなふうに歌いあげるが、英国よ、知るがいい
罪に加担した君は、悲しみの分け前も受けなければならない。

悲しみの分け前を受けるとするのは、世の常として一般的経緯として語られる。そして次の行では、自分たちにとってその時は遠いわけではない、自分の国に関する現在からみた近い未来に特定され、「荒廃はここにある。」

その時は遠い未来ではない。低いさざめきが広まっている
ささやき声で恐怖も。そしてそれが恐ろしいものをつくりだしていくのだ
地震の揺れがあったかのように、荒廃がここに
そちらでは、言葉にできない恐怖が心をなえさせて、
あの悲しい死、血を流して
病は以前には魂だけにあったのに。(II. 39-52)

金融や商売が生み出すものは、労働が作り出すものでなく、基盤のない富であると述べ、そして基盤がないのであるから、それはふっと消えてしまう。

¹⁵ McCarthy, pp. 455-90.

根拠のない富が雲散霧消
朝日が昇ると消え失せる霧のように
雑踏の市場、混雑した道で
友達、友達に会って、陽気にいそがしげに挨拶、そんなものはもうない
悲しげに、王侯貴族のようだった君の商人は道にはいつくばり、
変わり果てた顔をして、悪い日々の予兆となる。
腕組みをして、不安な気持ちでじっと見る
遠い西の方で嵐の黒雲がおこってくるのを。(II. 53-60)

西の方には、彼女たちが若かったころに自国と戦って自由と独立を得たアメリカが控えている。自国は、過去の国となる。かつて偉大な文明をもち、帝国として栄えた地域を想定して、その過去の偉大だった国々の仲間に自国がはいっていくことを、過去の栄光を称えながら、運命とみなそうとする。

私の国よ、愛され、崇敬されたのに
魂の結束で愛しく思われたのに
そのイメージは、私が幼かったときに思い描かれた
宗教の光を伴い、自由の聖なる炎も一緒だった！
祈っても避けられないのであれば、それが運命であるのなら、
かつて偉大であった国々の名前に加わるのが
薄暗くて冷たい三日月のように消えてしまうことは許さない
科学と詩神への恩を返していないのだから
君の法律は周囲の国々が尊敬するものだ
君の収穫物は思考の産物
栄光の空に輝く明るい星々
生きるに値する人生にする芸術も君のもの
もしも君の岸を光が去って行って西に向って流れていってしまうとしても、
君のランプからは光輝が放たれる。(II. 67-80)

．．．

君の手で植えたものがあり、君の精神が満ちる
彼らがゆっくりと進み、分け与えるにつれ
道徳や芸術がわかる繊細な感覚を
君がたくわえた知識を、新たな国が知る

君が考えたことを考え、君の想像力をもって輝く
君のロックやペイリーみたいな人たち¹⁶が彼らの子供たちを教え、
彼らが真実を求めていくとき、君の導きの星が指南する (II. 84-90)

こうして彼女が把握する現在は、すでに足元が危うくなっている（そしてそれに気づこうとしない）老いた偉大な国の現在であり、未来は荒廃である。しかし、未来は、自国から自由を勝ち取った国に文化として継承される。未来を政治的支配に求めることの空虚を指摘し、文化的帝国の永続性に望みをつなぐうとしているのか、それとも他に継承されて、自国は衰亡していくことを悲しい気持ちで諦観しているのか。

イングランドは、芸術が坐するところで、
灰色の廃墟と朽ち果てた石でのみ知られる
時がイングランドの額から花冠を奪い、
ヨーロッパは埃をかぶって、アジアと同じように停滞する (II. 123-26)

芸術も、武器も、富も、もたらす果実を破壊するものだ
商業は、美と同様に、一度しか春を迎えないものだ (II. 315-16)

終盤は、一般論のようにも受け取れるが、第305行ではロンドンの地名を出し、具体化する。マカーシーは、「彼女は啓蒙の声を発している」と述べる¹⁷。どのような意味でこれが啓蒙の声で、このような未来の想定のしかたが、彼女の政治的立場や、文学者として、あるいは編集者としての役割の自負とどうかかわるのか、今後検討していく課題とする。

¹⁶ 'thy Lockes, thy Paleys': ロック (John Lockesh, 1632-1704) やペイリー (William Paley, 1743-1805) のような哲学者たち

¹⁷ McCarthy, p. xi.

- Barbauld, Anna Lætitia, ed. *The Correspondence of Samuel Richardson ... Selected from the Original Manuscripts ... To Which Are Prefixed, a Biographical Account of That Author, and Observations on His Writings*. . 6 vols. Vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press, 2011[1804]. Reprint, 2011.
- Eaves, T. C. Duncan, and Ben D Kimpel. *Samuel Richardson: A Biography*. Oxford: Clarendon Press, 1971.
- Keymer, Thomas. *Richardson's Clarissa and the Eighteenth-Century Reader*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Keymer, Thomas, and Peter Sabor. *Pamela in the Marketplace : Literary Controversy and Print Culture in Eighteenth-Century Britain and Ireland*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- McCarthy, William. *Anna Letitia Barbauld : Voice of the Enlightenment*. Baltimore, Md. ; London: Johns Hopkins University Press, 2008.
- . “What Did Anna Barbauld Do to Samuel Richardson’s Correspondence? A Study of Her Editing.” *Studies in Bibliography* 54 (2001): 191-223.
- Sullivan, L. E. “Circumscribing Knowledge: Encyclopedias in Historical Perspective.” *The Journal of Religion* 70, no. 3: 315-39.
- Wexelbaum, Rachel. “Is the Encyclopedia Dead? Evaluating the Usefulness of a Traditional Reference Resource”. *Reference Reviews* 26, no. 7 (2012): 7-11.